
Through Milky Way

I f

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T h r o u g h M i l k y W a y

【Nコード】

N 3 9 0 4 F

【作者名】

I f

【あらすじ】

遠いところにいる彼。私たちの交信は一年に一回。七夕の日に行われる。今年も毎年と変わらないはずだった。だけど、今年は違った。急に過ぎ去っていつてしまう彼にこの思いを伝えたくて、彼女は携帯電話を握り締める。そんな、織姫と彦のお話。

彼は今とても遠い国にいる。

それゆえ、電話をしてもメールを送っても電波が届かないために、彼と連絡が取れないでいる。

だけど、一年に一回、まるで奇跡であるかのように彼と連絡が取れる日がある。

7月7日。

七夕のその日は私と彼が織姫と彦になれる唯一の日である。

その日の電波は天の川を通して彼の国まで届く。

それに気付いてから五年経った七夕の事。

その七夕の日は彼が引越してから七年経った頃だった。

恒例の如く、私は深夜二時頃にコールをかける。

二回、三回とコール音が電話口に響く。

その中でいつしか暗黙の了解となっていたのが、電話に出なかったら他に思い人がいるというものだった。

二年前、私が彼に電話をかけたところ、電波が届かなかったのか、何度かけても電話が繋がらなかった。私が諦めると、次の日に「ごめん、今は恋人がいるから……」と無情にも彼のメールだけが届いていた。

それはそうだ。相思相愛でなければ、私達が織姫と彦である必要がない。

わざわざ天の川を通して、私達の想いが届く必要もないのだ。

去年は不安になりながらも勇気を振り絞って電話したところ、何とか彼と電話が繋がった。どうやらこの間の彼女とは早々に別れ

たらしい。

さて、今年はどうだろうかと期待と不安を半分ずつ持ちながら彼が出るのを待つ。

六度目のコールで彼は電話に出た。

『……一年振りだな』

「そうだね」

まだ子供らしいあどけなさが残っていた声が、年を追うごとに大人になっていく。もしかしたら、私の声もそう聞こえているのかもしれない。

「どうだった？ この一年間……」

『今年大学を卒業して、今は仕事してる』

「え、どうして、何で!？」

『飛び級さ』

さも当然と言わんばかりに彼は淡々と答える。

「へえ、すごい頭良いんだ……」

『そんなことないさ。この国では当たり前のことだ』

「へえ……」

。 他がそうでも飛び級できるってことは十分すごいと思うんだけど……。

「私はね、大学二年生になったよ」

『じゃあ、何とか落第は免れたようだな』

「うっ、うるさい！ ちゃんと勉強してるんだからね！」

『ははは、悪かったよ……』

そう言った直後に彼はゴホゴホと咳き込んだ。

「風邪でも引いたの？」

『ああ、ちよつとな……』

「ひどくならないように気をつけてね」

私は上辺だけの心配の言葉をかけながら話題を変える。

「そうそう、それでね……」

色々な話をした。

下らない日常の話からサークルのこと、多数の男子に告白されたけど、全て断ったこと。

その度に彼は適当に相づちをうち、適当な言葉を返す。

「ねえ、そっちはどう？」

「……どうって言われてもな、そんな劇的な変化があるわけじゃ……」

彼はそう言ってから再び咳き込む。それにしても彼、咳の回数が異常に多い気がするんだけど……。

そう思ったそばから彼はもう一度咳き込んだ。

それにしてもひどい咳き込み方だと思う。いくらなんでも普通の風邪じゃない。

それに後ろの方でピーという機械音が聞こえるような気もする。

私は急に心配になって彼に尋ねる。

「ねえ、本当に風邪なの？」

「そうだって言っただろ……」

そう言いながらもまたゴホゴホと咳き込む。彼は、絶対に風邪じゃない。

「嘘でしょ。ねえ、本当のこと言ってよ！」

「本当だって、何でそんな事が言えるんだ？」

「後ろで鳴ってる機械音は何？　ねえ、もしかして重い病気なの……？」

私がそうまくし立てると、彼は黙った。だから、私は分かったんだ。そのことが凶星だって。

しばらくの沈黙がその場を制し、彼の咳と心音図の音だけが電話機から聞こえた。

「……何で言ってくれなかったの？　病気だって……」

そう言つと彼はしばらくの間を空けてから答える。

「……言える訳ねえじゃねえかよ。これが最後かもしれない……」

……
えっ。

「最後？　ねえ、最後ってどういうこと？　ねえ！……？」

後ろの心電図の音の間隔が速くなっている気がする。それと一緒に私の胸の鼓動も速くなっていた。

「どういうこと？　ねえ、ちゃんと言ってよ！　ねえ……」

「……聞こえるだろ……心電図の音が………分かるか、もう長くねえんだよ……」

彼の声は先程とは打って変わって蚊の鳴くような声になっていた。もしかしたら、電話の電波が生命維持装置に悪影響を与えているのかもしれない。

「……いいよ、もうどっちにしろ生きてらんねえ。だから電話は切らねえぞ……」

その声は私に言ったのではなく、彼の近くにいた医者にしたのであろう。近くで医者は何語か分からない言葉で叫んでいる。

「……最後に……言いたいことが……一つだけ………ある……」

「何？　何でも聞くから？　今日なら叶うはずだから……！」

彼の言いたいことがお願いか分からないのに私は電話口でそう叫んでいた。だって、今日は七夕だから！　叶わないお願いなんてないんだ……！

それは私がお願いをしたかったから出てきた言葉なのかもしれない。

生きて……生きて、生きて……！

心の中でその言葉を反復する。

知らないうちに目元が潤んでいた。

頬を涙が伝っていた。

なりふり構わず、私は電話に向かって叫んでいた。

「……ちよっと静かにしてろって……」

彼の言葉に、私は顔をぐちゃぐちゃにしながら頷く。

「……昔からな……」

彼の言葉に耳を澄ます。

「……お前のことが……」

彼の一言一言を聞き逃さないように、電話口を耳に強く押し当てる。

後ろの心電図がそれを邪魔するかのようにけたたましく鳴り響く。

「……………す——」

——好きだったよ——

ブチッ。

彼の最後の言葉を伝える前に、天の川からの通信が途絶えた。

その途端、私はどうすることも出来なくて、その場に泣き崩れた。壁に寄りかかって座り込み、耳に当てていた携帯電話が、それを持っていた手が、だらりと力なく落ちる。

そして、しばらく泣きじゃくった後、目元を拭いながら呟いた。

そんなの、知ってるよ。

それからしばらくしても、彼が死んだという情報は入ってこなかった。さすがに距離が遠すぎるだろう。一個人の情報が入ってくるはずもない。

それから、私は一日に一回は電話をかけた。

七夕の日にしかかからないと知っていながらも。

私達が織姫と彦達ということを知っていながらも。

受話器を置くことは出来なかった。

だって、こんな七夕は、悲しすぎるから……。

それから、一年経った。

今もまだ電話は続けていた。

そしてその年の七夕の日、私は去年と同じように電話をかけた。彼が生きているようにと願いをかけながら、コール音を数える。天の川に思いを託しながら携帯電話を握りしめる。

一回……二回……三回……

ガチャ。

「もしもし——ですけど……」

私の頬を幾筋の涙が零れた。

そして涙声ながらも彼に呟いた。

「そんなの、知ってるよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3904f/>

Through Milky Way

2010年10月8日15時05分発行